

トビと、太陽と、エビス様

——福神信仰として——

一、はじめに

謹んで、この一文を、今は亡き藤内喜六氏の御霊前に捧げる。

本稿は、別府市の西境に近い内山うちやまから、トビ・明礬みょうらんにかけての、表題にかかげた三者の示す「福神」信仰の関連を考えようとするものである。

それらに共通するフェチシズムの儀礼を調べてゆくうちに、さらにもう少し基本的な、思考の原点から出直すことが、これら三者の関連する様子を明らかにする道ではないだろうかと思いはじめた。これは私自身の問題ではあるけれども、それを記していくことが、同時に、読者の諸兄弟にも理解して頂く捷徑になるのではないだろうか。遠まわりながら、記していきたい。

二、思考の標座

富 来 隆

私たちの思考の仕方は、モノゴトを比較して理解することから始まる。これが、基本的な思考の「型」と言つてよい。

例えば、男と女、右と左、上と下、表と裏、さらに山と海、天と地、昼と夜などなど。

中国大陸から伝わった「陰と陽と」の分類は、その後ながく日本人の思考に大きな影響を与えて、今日に及んでいる。これらはまた後にみることにしよう。

右のような二分法は、対立の思考のようであるが、この両者の間にあるもの（中間）を考へることによって、三分法となる。と同時に、両者の対立がこれによって接続することも生まれる。

いま、私たちの身近にある例として、いわゆる六曜表（曆日表にみる「六輝の吉凶」とされるもの）を取りあげてみたい。

1 先勝 2 友引 3 先負 4 仏滅 5 大安 6 赤口、右の順にしたがって進行するが、これを内容から考えると、次のようになると言えよう。

まず、①先勝と、②先負とに二分される。先勝は午前が吉で、午後は凶である。先負はその反対に、午前が凶で、午後が吉である。

両者の中間のものとして、③赤口が考えられている。午前と午後とが共に凶で、その中間の「おひる前後」が吉となる。午前から午後に移りかわる境界を、中間として独立したものとすることで二分から三分になる。図示すると、下のようになるう。



つぎに、④仏滅と、⑤大安とが対立する。仏滅はすべてに凶であり、それに反し、大安はすべてに吉である。

その中間的なものとして、⑥友引が考えられて、これは、良いことには吉で、わるいことには凶とされる。

こういう中間項を考えることで、二分から三分になる。

下図のように示されようか。

二分されたものの中間項を、独立したものと認めることで、三分となることは理解できる。

こういう三分法が存し得ることは認めてよいだろう。

じつは、こういう風に考えることは、私自身も今まで思いもよらなかったことである。ただ、それだけに、右のような①②③、④⑤⑥の順が、六曜表（1〜6）になると、なぜ、①⑥②、④⑤③という順に置きかえられるのであろうか。それにはそれで、十分な理由付けが存在することであろう。今後、しらべてみたい。

右によっても分かるように、二分法が対立であるのに対して、その中間項を入れて三分とすることによって、ここに接続の思想が入ってくる（対立から接続へ）という点に、大きな変化を認めざるをえない。

次に、海での、上面と下底との間に、海中が考えに入ることにより、住吉の三女神が生まれている。



また、沖島と陸地との間に、中の大島が入ることで宗像の三女神が存している。

これらの三女神は、二分から三分へと発展したものでなく、初めから並立して考えられている。

宗像三神の影響が濃いとみられる八幡大神も三柱である。そして八幡神において、二殿形式（一ノ殿・二ノ殿・三ノ殿）がとられていることで、その並立は明らかである。

二分と三分と。そこには大きな飛躍がある。茲において、偶数と奇数との、陰と陽との、思想的な標座が、明らかに認められると思わざるをえない。

ところで、住吉神の化身は、ナーガ神（ナガラ神）であり、これに対し、宗像神の化身は、トビ神（トベ神）と呼ばれる。ともに竜蛇神である。神社名・地名・（古代の）人名などとして全国に数多く存している。

八幡神は、ヤアタ神であり、これも前の二神と同じく竜蛇である。（拙著『卑弥呼』参照）

まず、ナガ（ナガラ）の宛て字としては那賀・那珂・長・中また長等・長良・名柄・永原などがある。

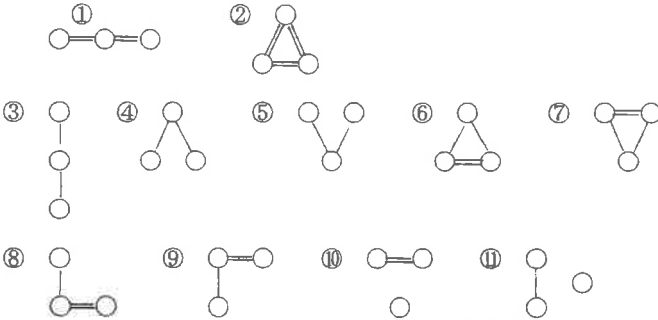
関係図 (三者と二者の)

〔二者〕



左を、具体的に a. b. c を入れると
①は1通り
②は2通り 計3

〔三者〕



①は3通り
②は1通り

③は6通り

④⑤⑥⑦は
3通り
⑧⑨は6通り
⑩は3通り
⑪は6通り
計43

ハナレル

◎例えば、天照大神、月読神、スサノヲ神は、上図のどれに当たるだろうか。
(日神) (月神) (暴風雨神)

トビ(トベ)の宛て字として、鷄・飛・登尾・登美・鳥見・富・富尾また臣・留・積・詰などがある。

一緒になった飛永・永富・中臣などもある。

ヤアタとしては、八田・矢田・矢羽田・矢幡・八幡など、これも数多くみられる。

表題の「トビ」が、右の「トビ神」を示していることは、もはや言うまでもない。

もう一度、元にもどろう。二分の思想においての、もうひとつ別の問題がある。

男と女と、その中間は何なのか。昼と夜と、その中間は何なのか。生と死と、その中間は何なのか。

これらは、前に述べた理解の仕方では片付かない。したがって、別の思考の方法が取られることになる。これについて、やはり一応、明らかにしておくことが先へ進むためにも必要であろう。

男性と女性と。この頃のように、手術して男から女へ変わる、というような問題ではない。二分の思考なのである。ドイツ語で、*der* と *die* とある。その間

に中性として *das* があり、こどもは *das kind* 中性と考えられている。同時に、西欧では、子供はまだ人間になっていない「動物」として、きびしくシツケをしながら育てる。八重歯なども動物的として、早く抜く。これと反対に日本では、七歳までは神のうちとされ、八重歯も可愛さとされる。この頃は成人にも多くみられる。幼児化現象だという人類学者もいるが、しばらく措こう。問題は、つぎのような事例のときである。

- ① 結婚して、自家を出て、婿の家につくあいだ。
- ② 生と死のあいだ(出棺して、葬るまでのあいだ)。
- ③ 俗と聖のあいだ(タイの事例で、出家して、家を出てから時間的・空間的に寺に入るまでのあいだ)。

これらは社会人類学でいわゆる「どっちつかず」状態(境界)とされる。

「あいだ」は、「間(ま)」である。「ま」は「魔(ま)」にも通ずるのであるか。左の例がある。

昼と夜とのあいだ。朝の夜明け時・夕の暮れ時が、ともに「逢魔(おま)が時」とも言われることである。

さきの①嫁入りのときに、花嫁のそばに、ヨメマガイ

として年ごろの娘が付いて行くのも、間(ま)が魔(ま)の時だからである。

このような「どっちつかず」(境界)の時間・空間において、一の重要な儀礼が存している。そして、このことが大切な点なのである。結論を先に言おう。

一般に、「儀礼」とは何かを行なう「コト」であり、そのための「モノ」を媒介として、それを象徴的に示す行事である。まず、その儀礼がとくに顕示的になされることで、他の心情に訴えるものをもつのである。

また、儀礼は、同じ状況のもとでは、いつでも、同じことがなされる(くり返し)。「くり返す」ということで、儀礼は信号化され、社会化され、正当化される、ということになる。

さきの、婚礼でも、葬式でも、またタイの出家でも、家を出るときに「三廻り」の行事がなされる。途中は、足を地につけない(馬・車・肩車などによる)——これは「どっちつかず」の状態だからなのである。そして、先方についたとき、婚礼でも、葬礼でも、出家でも、「三廻り」して、儀礼が完了する。

三度廻る、ということ。ここにも「三」の数字が出てくる。中国の古書『酉陽雜俎』(東洋文庫所収)の巻一に「礼異」の項があり、次のような文がある。

「妻を迎えるにあたり、粟三升を臼に入れ、席一枚で井戸をおおい、泉(牡麻)三斤で窓をふさぎ、箭三本を戸の上におく。新婦が車にのり、婿は馬にのって車のまわりを三回まわる」(三匝)。

日本の花嫁が、家を出るとき、馬にのって、三度廻るのも、古例から発したものであろう。三の数字は、聖数として、伝承されているのである。「三廻りの儀礼」については、先年、中野幡能氏編『宇佐神宮史研究』所収の一篇として、わたし「三」これについて詳述する余裕はないが、ほかにも「三」を聖数として用いられているのは、諺などに色々と知られるとうりである。

七・五・三の陽数が、聖数として、今日も珍重され、多くの行事(年令・季節など)もなされている。表題のエビス様も、七福神の第一の神である。

三、万能神としてのへび

へびは神の使いとされる。とくに白蛇において顕著であり、福神とされている。「財布にその皮を入れておくと金に困らない」とか、「蛇皮の財布をもつとお金持ちになる」とか。戦前に、子供の時、母から聞かされたことを覚えている。これは現在でも、同じである。

戦後に、郷里の坂ノ市・丹生に帰ったとき、やはり母から、「鳥の脚のザラザラしているのは、前世にへびだったときの名残りといわれる」と教えられたのを想い出す。これは、丹生の台地を歩いていて、へびが草むらに逃げこんだら、途端にバタバタと雉が飛び出したのに出会って、母にそのことを言ったからだ。

いま考えれば、これらのことは、ひろく洋の東西にわたって、また古今に及んで、同じ思想が伝えられていることである。

まず、左の史料から見ていきたい。

『八幡宇佐宮託宣集』の、霊、巻五に、

「金刺宮（欽明天皇）二十九年に、豊前国宇佐宮菱形池

の辺、小倉山の麓に、鍛冶の翁あり、奇異の瑞を帯び、一身にして八頭を現す、人聞いて実見の為に行くとき、五人行けば三人死し、十人行けば、五人死す、故に恐怖を成し、行く人無し、茲に於いて、大神ノ比義、行きてこれを見るにさらに人無し、但、金色の鷹、林の上に在り……忽ちに金色の鳩と化り、飛び来たって袂の上に在り（中略）……比義、五穀を断ち、三年経るの後……幣を傾けて申す……、即ち三歳の少児と現われ、竹の葉の上に於いて宣ふ（中略）、我は是れ、十六代誉田天皇（應神天皇）なり。」

同じく、霊、巻五のなかに、

「元正天皇の五年、養老三年、大隅・日向両国の隼人等襲い来り」……豊前国宇努の男人……ここに神託あり、
「豊前国下毛郡野仲の勝境の宝池（大貞の三角ノ池）……林を出ずれば日月の下、林に入れば天地の外なり、ある時は霊蛇気を吹いて、晴天に雲を成し、ある時は鳥と化し光を放って、陰夜昼の如し……」

その後、細川三斎の伝承として、神様の正体を見たいと言って、片目がつぶれたことを伝える。蛇神は一眼の

竜だった、とされ、いまでも下宮の扁額に、その画が刻まれている。

これを図式化してみる。

まず、① 鍛冶の翁あり、↓ ② 八頭（ヤアタ）の大蛇 ↓ ③ 金色の鷹 ↓ 金色の鳩 ↓ 三歳の童（天皇）

『託宣集』に見えるように、「靈蛇化^レ鳥」の図式がある。そして「鍛冶の翁」と関連した「一眼の竜神」でもある。

このこと、伊勢の神でも同じことが伝えられる。

さらに、金関丈夫先生からお教え頂いて、東京の丸善より W.Rocher *The Serpent in Kwakiutl Religion* を購めた。アメリカ・インディアンでも同じように「蛇神」があり、空に上がっては鷲^{わし}となり、海に入っては鯨^{くじら}となるとされている。

まさに・これは、世界的な文化の「型」である。

「一ツ目の竜神」については、まさに柳田国男翁の、『一目小僧』などに述べられ、さらに貝塚茂樹教授の、『神々の誕生・中国史Ⅰ』に詳しく述べられている。

一眼の竜神は、冶金（鍛冶）に関係のある神であり、かつ、この神は風伯（タタラ神）である、と説明され、中国古代において山ノ神を鍛冶族の守護神とし、竜（蛇神）をトーテムとする部族が多かっただろう、とされている。

大分県山香町の小武寺^{こぶでら}に安置される俱利伽羅蔵（竜神が立って、剣をのみこもうとしているもの）が、ふっと目に浮かんでくる（タケ take 竜蛇神）。

さらに、託宣集での「八頭の大蛇」には、スサノヲ神の出雲での「ヤマタの大蛇」が連想されるが、さらに、インドのナーガ神、またアンコール・トムの橋の欄干で



ナーガ(竜王)の光背に七頭の蛇が、首飾りはその胴体である

「インドの仏蹟」

の「多頭の蛇神」を想わずには居られない。これまた、世界史的な図式（インド文化の伝来）の一つである。

インドや中国のことは、それぞれ専門書にゆずる。

やはり、神武天皇の御東征に大和入国での金の鵄^{とび}伝承が、最も知られており、また本稿の目的に適うものでもある。すこしく述べたい。それというのも、内山の東北（明礬にちかく）に「トビ」の地名があり、おそらくは右の「靈蛇化^レ鳥」の型を示すものだろうと私惟するからである。

『古事記』・『日本書紀』に記されている内容を要約すると、つぎようになる。

日向から東征の旅につかれた神武天皇は、速吸ノ門（佐賀の関）で、珍彦（ウズヒコノ渦彦）またの名、棹根津彦を水路啓開の先導とされる―ウズ彦は、のち大和の国造に任命される―。瀬戸内海を東道して、大和に入ろうとして、登美ノ長髓彦（略して、登美彦）に妨げられ、日神の子が太陽に向かって戦うからだと思われて、南に紀州にまわる。熊野で事件があるが、高倉下（タカクラジ、つぎに「倉」だけでクラジとよませる）の援け

をかりて、北上する。

この地方の土酋（土蜘蛛と記すのは、朝鮮語で Kami となり、音を利用して悪口である）の名を見ると、兄倉下、弟倉下あり、また名草戸畔（とべトビ、蛇神）丹敷戸畔、さらに新城戸畔などの名が見えて、登美彦のトビと同じ呼び名である。

こうして、ついに天皇は登美彦（正しくは登美ノ長スネ彦であり、書紀では長スネ彦の名となる、トビもナガも蛇神のこと、とは前に記した）を討つことになる。

（長スネ彦）の側から「金色の靈鵄飛び来たり、皇弓の弭に止まった。いま鵄の邑という―登美彦のトートルムが天皇側に移ったために降参したということである―（軍人の金鵄勳章のいわれである）が、この一文「靈蛇化^レ鳥」のことだと受け取られる。

神武天皇の前代（神代記）のこととして、山ノ幸彦と海ノ幸彦が道具をとり代えること、釣り鉤をなくすこと、塩盈珠・塩乾珠（干・満）のこと、そして海神（竜宮）の子女たる豊玉姫・その妹玉依姫のことがある。天皇は竜神の子なのである。各地の土グモも、また、トビやナ

ガラの名をもつ竜神の子と言えらる。

神武天皇の皇妃「媛タタラ五十鈴媛」その妹の「セヤタタラ媛」が、三輪神社の近く狭井社（サイ||soi. 鉄）に祀られていること。

これらを併せ考えると、日神と竜蛇神と鉄と、そして霊蛇化_レ鳥とがそろってくる。さきの『宇佐宮託宣集』の記事を、そのまま示していることになる。

天皇は、天照大神（日神）の子孫であると同時に、竜蛇神の子でもある。

金関丈夫先生の『発掘から推理する』（朝日選書）のなかに「シッポのある天皇」と題して、應神天皇のことが記されている。『塵添瑤囊鈔』が引用されて、天皇にシッポがあったのは、竜神の子孫だからである。あるとき、天皇出御のおり、内侍が早まって障子襖をたて、天皇の衣の裾をはさんだ。そのなかにシッポのさきがあった、天皇はいたく怒られ、「尾篋なり」（無礼者め）と言われた。狼藉を、尾篋_ツというのは、これから起った、という話。

日本でシッポのあった部族は、豊後の緒方一族であり

（『平家物語』）、身体に、ヘビの尾の形や、鱗の形があっ

たという。鱗形は、伊予の河野一族にもある。平氏の敵島、北条の鎌倉・江ノ島は、九州の宗像の女神の別れで、江ノ島の弁天様が竜女であったことは『太平記』で知られる。宗像神をまつる部族は、家紋に鱗の形を示すものが多い。宗像は胸形で、緒方は尾形であり、イレズミ、つまり三角形のイレズミであったと言われる。

遠く、インドのヒンズー教では、△を男性原理とし、逆の▽を女性原理とする。この組み合わせからは、当然に鱗紋が生まれることになる（『蛇神論』）。

これを図示すると、緒方系の三ツ鱗紋は△であり、外に△、内に▽ということになる。これに対して、宗像系は△と▽とが同じ大きさで☆となる。

ともに、古代の海人族の名残りとして、インドさらには中国からの伝来を偲ばせるに十分であろう。

豊後の緒方氏一族が祖母岳を中心に蕃居し、その神がトビ・トビノオと呼ばれて、実は宗像系のトビ神と同じであること。これも考慮に入れておく必要がある。

いずれにしても、竜蛇神は世界的に万能の神であり

天空に上っては「化_レ鳥」、海に入つて「鯨」などの魚となる。また、脱皮することによって、「不死の生命」をも象徴する。

ともかくに、別府の内山から東北に、「トビ」という地名があることが問題なのである。近年、内山溪谷に、「ツチノコ」騒動があつて世間を驚かしたが、また一方に、鳥の「トビの湯」発見の伝説があることは、右に記したような「靈蛇化_レ鳥」を、そのまま地で行くような感を呈している。

宗像系のトビと、住吉系のナガ（ナガラ、これはインドのナーガ・ナガラからの伝播、日本語化である）とが日本での代表的「蛇神」となったことは申すまでもないだろう。

奈良で、金闕丈夫先生の奥様から伺つたところ、天理のほとりから三輪町に行くのに「ミワに行くとは言わないで、トビに行くと言います」とのことであつた。さらに「ヘビのことを、ミイさまと言います」と教えられた。そう言えば、三井寺のあるところ、長等^{ながら}山で、長良神社があり、正月の綱引きで知られている。

ミイとは、京都弁（関西弁）で、一音の語をながくのばすことである。一二三をヒイ・フウ・ミイと言ひ、子丑寅卯辰巳を、ネエ・ウシ・トラ・ウー・タツ・ミイと、引きのばすことで了解されよう。

さらに、「ミ」という言葉に、「三」の字を宛てることが多く、三井寺が、巳の寺（長等^{ながら}山にある）のことも分かるが、大分でも面白い地名がある。日田と玖珠と山国町との境ちかく、一尺八寸山がある。ミオウ山と呼ぶ。ミオーとは、濁のことであり、水尾のことである。それを「三尾」の字をあてたことから、三本の尾の怪獣が居たという説明が伝説化してしまつてゐる。

西鶴の『日本永代蔵』巻四に、「時津風静かに、日和見乗覚えて、西国の杵尺八寸といへる雲行きも、三日前より心得て……」とある。一尺八寸とは、頭にかぶる笠のことである。よく「お山が笠をかぶつたから、間もなく雨だ」と言われるが、その笠雲のことを言うのである（笠の直径一尺八寸）。

ミオに水尾ならぬ三尾の字をあてたことが、新しい伝説を生んだのであり、「三」の字は、いろいろな利用さ

れている。

山国川の両岸は「御食ミケの郡」であり、分かれて上毛郡と下毛郡（シモツミケ）になった。川口ちかくの両岸に「三毛門」の地名ものこっている。「御食」（みけ）のこと。「御食ツ神」が「三狐ツ神」と記され、稲荷大明神に親子三匹の狐が祀られていること。そしてそれが稲（農業）の神から商業の神になっていることは、現在よく見られる。

コトバに同音・類音の文字をあてることは多いが、それから新しい伝説が生まれると、私たちを惑わせる。

宇佐八幡の神のこともある。その第二殿は比売大神で宗像三女神であることは、よく知られている。――「三女神、葦原中ツ国の宇佐島に降る『日本書紀』一書」――そして、神武天皇をお迎えした宇佐国造ウサツ彦の祖が、天ノ三降命であり、天孫降臨に供奉し、のちウサ川上に住したとされる。

これも、おそらく「御食ミケツ神」↓「三狐ミツク神」となったと同じように、「御降神」↓「三降神」として「三匹の蛇神」と変化したもの、と解するのが至当だろうと思わ

れる。

「御」（み）から「三」（み）にかわること、これはただ同音というだけでなく、三・五・七が聖数としても考えられていることから、「御」に「三」を用いることに抵抗を感じなかったからではないだろうか。そう思わなければならぬほど、三の文字がよく使われている。また、陰・陽の思想として、私たち日本人の心に深く食いこんでいることもある。

大分市高瀬石仏

深沙大将



「西遊記」の沙悟浄で、赤い頭巾に赤い褌、ドクロの首飾りお腹に女のカオ、手と足に蛇神がついている

四、福神としての太陽とエビス様

お天道さま（太陽）を拝むこと。これは私なども子供のときから嫉しんげられてきた。毎朝、手をうって拝むだけでなく、初日の出を拝みに、海岸に出かけたり、また富士山に登ったときは、八合目に泊って、翌朝、頂上の上って、御来迎（ごらいこう）を拝んだりした覚えがある。

天照大神の遠い昔、記・紀の神話の時代から存在してきたものとされている。この別府の地にも、それが見られることは言うまでもない。

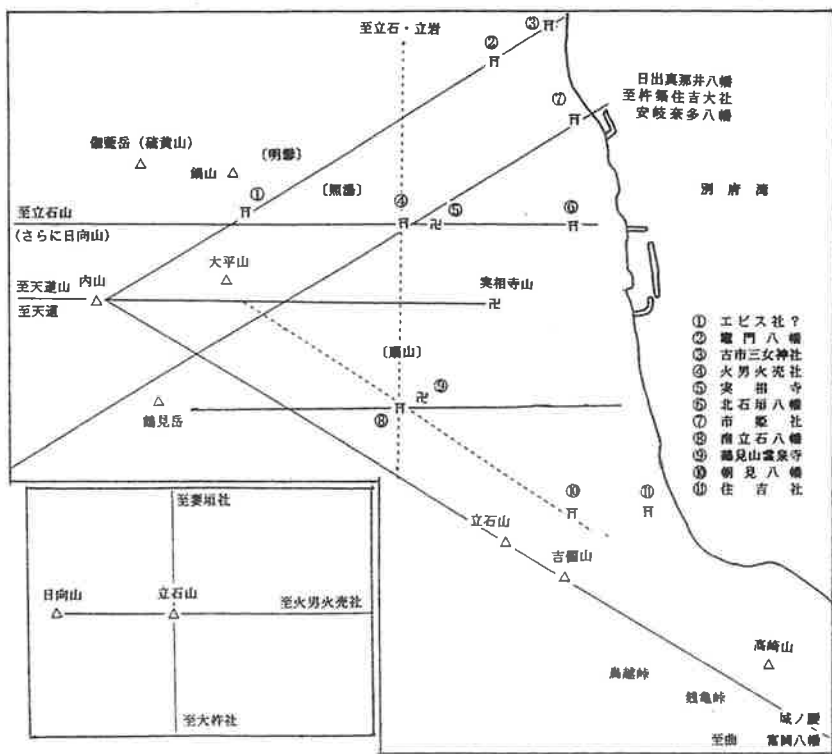
世界的に、太陽崇拜が、「巨石」をもって象徴されること（『エリアーデ著作集』など参照）、その地が「立石山」名をもって示されることである。また、玖珠には筑後川の北岸に「天道山」・「天道」の地名もっている。それが修験道と混融したとき天童法師とよばれる偶像の出現となる。国東半島の末山本寺、屋山・長安寺の「太郎天」像は、正しくは「太郎天童」像である。聖徳太子の法躰をなし、カオは童児である。

ここでは今、簡単に当地の天道線を図示してみる。湯

布院北の「立石山」から東への線（春分・秋分の日の出の線）をひくと、①内山から東北に30度―これは夏至の日の出線―、春木川の源流にある円（エビス社）をすぎ②鶴見岳から東北30度の火男火売社にとどく。さらに③実相寺をすぎ、④北石垣の八幡社にたつする。これらの社寺が、東西線上にある、ということである。

玖珠の天道山から東への線を引くと、別府の「内山」にとどく。この内山から東北30度の線をひくと、春木川源流の円印にとどく。調べてもらったが、よく分からないので、現地行しようと、入江氏に同行してもらったが、台風のあとで、明礬から山への道は土石で車行不能で、ついに断念した。この近くに「トビ」の地名があり、また、エビス社のことがあるので、おそらくこの円印がそれであろう。さらに、ここから30度線を伸ばすと竈門八幡にとどき、海岸に三女神社（宗像の神であり、この化身がトビ神である）にとどくには驚かされた。まるで夢を見ているようである。

内山から東南30度の線には、乙原から柳の地（この近くに、タタラと隠山とあり）をすぎて高崎山の城ノ腰を



金剛山長安寺
太郎天像

通り、杵原八幡宮をかすめ、さらに大分川畔に至って古国府の対岸に、曲に富岡八幡に届く。曲(まがり)とは、イカリ・マガリと対応するカリ(韓語で Kuri 銅の義、金属の古語)であり、日出町にもイカリ・マガリキがあり、遠賀川上流の香春銅鉾山に勾金・伊加利の地があって、神功皇后伝説あり、また宇佐宮へ奉鏡の神事の本地である。そして、富岡とはトビの

岡の義であり、白鳥伝説がある。ここでは白サギから白旗になったとの伝説があるが、『鉄山秘書』によると、「鍛冶の神が白サギにのってやって来た」とされている。この曲では、鑄鉄の遺跡が発見されたこと（いま森岡小学校々庭）、本紙の 前号に紹介した。

30度の線上に、ういう古社が存していることである。さらに、鶴見岳のばあいを見よう。真東への線上に、南立石八幡宮と鶴見山靈泉寺がある。南立石の真北に立岩が、さらに北に立石にとどく南北の一直線上にある。

鶴見岳から東北30度の線は、まず火男火売社（この南にタタラ地名）、さらに火売社をすぎ海岸近くに市島姫社（宗像三女神の一）にとどき、それより別府湾上を日出町の真那井八幡から杵築の住吉社に、さらに安岐の奈多八幡（海上に市杵島あり）に達する。古社が出そろっていることが注目される。火男火売社が鉄・鍛冶の神なることは前号に詳述した。

このようなことが偶然にできるであろうか。

二つではない。三つ・四つ・五つと重なりあっても、なお偶然だと言えるだろうか。よく分らない、と逃げ

られるであろうか。やはり、「天道信仰」が存在して、だからこそ、そのような位置に（天道線上に）、多くの古社が在るのだと解するのが、もっとも自然であろう。

太陽（お天道さま）は、万物の生命の根源である。

生命とは、生きることである。「生は、性であり、聖である」と言えよう。そうであればこそ、太陽は人々の崇拜の根源であり、神そのものでもあるのだ。生物神の代表として竜蛇神は、あの蛇の脱皮が、不死の象徴と考えられているが、さらに太陽こそ「陽神」の根源なのである。男の一物を陽の語で示すのも「陽」が尊重されたからである。



陽形大黒 「性神史」

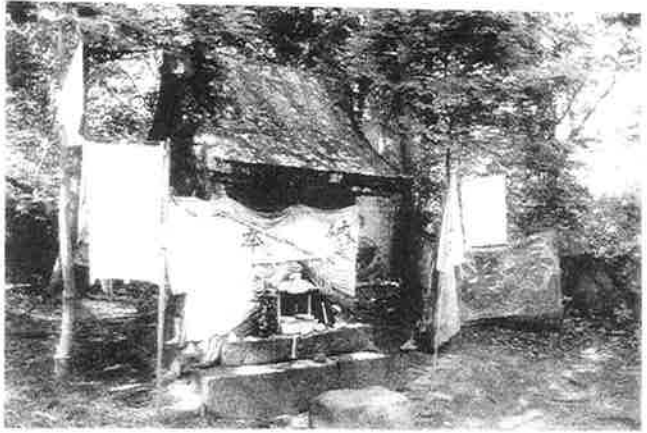
陰陽（おんみょう）思想の詳しいことは別としても、

三の数字が陽数の基として、聖数として崇められたことは、さきにも記した。稲荷大明神の前に三匹の親子狐が祀られているのは、「御食(みけ)ツ神」に「三狐ツ神」の字をあてたことによる。親子の形をとって、ウメヨ・フヤセヨで、福神は性神になった。そのことから、農業神が商業の神に変わってしまった。大分でも、いま銀行やデパートの屋上に祀られている現状である。

七福神の第一なる「エビス様」が、本来は漁業の神であったかも知れないが、これが商業の神とかわったことも、お稲荷さまと同様である。そして、性神の姿をもつ福神となっている。もちろん、本来の漁業神のこともまったく忘れたわけではなく、漁師たちが詣でている。この「市エビス」も同様である。「市」に「エビス」が付いているのであって、「エビス市」ではないことが何よりの証拠とも言えよう。そして、次の史料がある。入江氏からお送り頂いた。これは鶴見村伝承記で、「鶴見七湯の記」と同時期に記された鶴見村の伊島重枝の作だと、藤内喜六氏は言われている。左にその初めの部分を記して、内容を明らかにしておきたい。

祓川市蛭子并水の戸のこと

照湯の温泉場より河上三町ばかりのぼりて、
祓川と云う処有、大平山の北のふもとにして
川より北のかたには平らかなる野面ら広きち
也 古へ鶴見社に位田の神領ありて 大社の
時 此処にして、年々夏越の御祓有しより
祓川の名有とかや 其比は三日の市有て遠よ
り商人あまた集り賑ひけるよし 此の河辺に
其市をなせし時の 市恵比寿の石体有て 今
も春秋二季の祭事は 小倉の長佐藤信敬か家
より 怠りなく執行する事也 且此の市蛭子
に祈るときは、よく海獺有とて この速見の
浦々にて網引の獲もの少なき時は、立願をな
すに 必ずその験し 有けると也 そのとき
は、獲ものうちにて何魚にても大なるを一
尾 是に神酒を取添て 其長たる漁者 この
市夷にも詣ふて 石体のまへに夫を備え 大
宮司家にたのみ 祓を奉也



祓川の市えびす社

右の文で分かるように、鶴見社の神領

(位田)、祓川の地で、毎年、夏越の神事が行なわれた。その頃は、三日市が開かれ、遠近の商人が集まって賑わった。この市の河辺にエビスの石体あって、

これを「市エビス」と呼んだのである。もちろん漁師もやってきたことである。

このエビスに、①蛭子、②恵比寿、③夷、といろいろな文字が使用されている。

これについて、幸いに民俗学者宮本常一氏の『日本民

衆史』第三巻として『海に生きる人々』がある。その中に「エビス神」の項があり、およそ次のようなことが記されている。

いま祀られているエビス神のうちで、最も古い社は、^{いっく}厳島神社の境内に祀られた夷社であろうと言われ、平安時代の終わり頃にはすでにかなり信仰されていたようである——この厳島は、宗像の沖ノ島から東の天道線上になる。宗像から東北30度線は、萩の^{はぎ}見島(日崎)をすぎ、出雲の日ノ御崎にとどく。さらに沖ノ島から東南30度線は国崎安岐の奈多八幡の^{いちまき}市杵島にたっし、さらに豊後水道の伊豫・日振島にとどく——

エビスは古く『夷』と書いているから、異国から伝来の神であつたらう。——『日本風俗史辞典』にくわしい——これが後には七福神の一にされて、室町時代には福の神として信仰されるようになった。

また、エビス神を日本神話のなかに求めて、イザナギ・イザナミの神が高天原で国生みをしたとき、最初に生まれたのが蛭子(ひるこ)で、その蛭子をエビス神と考える伝承がある。瀬戸内海地方のエビス社に多く見かけら

れる。

記録に残るところで古いのは、長寛元(一一六三)に奈良東大寺にエビス神が祀られ、乾元元(一一〇二)に奈良の南市がはじめられると、市神としてエビスをまつることなどあって、「市」の立つところに祀られるのがひとつの流行になったようである。

同時に、エビスが商人に信仰されるようになっても漁神としての性格も失われたわけはなく、漁民にとってもますます信仰されており、その中には鯛を抱いている神像も少なからず存在する。

また瀬戸内海や豊後水道ではイワシ網のミト、すなわち袋のついているところについている浮子をエビスアバといつて、神霊がやどるとされている。

一方、エビス信仰は、交易の神として、都会でも祀られるようになってくる。商人講としても盛んである。福の神なのである。

宮本常一氏の所論、おおむね右の通りである。

これによってみれば「昔この辺が海岸だった」というような伝説(堀藤吉郎『別府の伝説と情話』)は、エビ

ス神が漁師の信仰だと思ふことから、後世の物知りが作り出したものに他なるまい。

伝説とはすべてこうしたものである。もし、この山の裾が「波打ち際のあとのようにある」などというなら、何故に、城島(きじま)が海の中にあつた島だ、と思わないのだろうか。この矛盾を何とも思わないところに、伝説の伝説(作り話)たる面目がおどっている。

やはり、右に記された幕末の「鶴見伝承の記」のように、鶴見大社の大祭に「市」がたち、そこにエビス神が祀られたことが、事実だろうと思ふ。漁業の福神として、別府から日出の漁師がお詣りに出かけていることは、最近まで盛んであつた。

さて、天道信仰とエビス神とが、広島島の厳島で結びついたことは了解された。そして福の神として、信仰されたこと、七福神の他の神々と同じように、これも「性神」の姿をとること、当地の場合も同じであることも、大雑把ながら説明できたように思える。私の理解の仕方は、現在、右のようなことである。